

郷土を知り、郷土を愛する

## 志木市 歴史とんぼ

— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 —

## 第39回 志木の酒造業

▶ 三上家酒造蔵



志木市の本町地区は明治7年(1874)以前は引又と呼ばれ、酒造業が盛んに行われていました。引又にて酒造業が栄えた主な理由は次の3点と考えられています。

- ①武蔵野台地の先端に位置していたことで酒造に適した水が豊富に得られた点
- ②米を精白する水車が宝暦10年(1760)以降、野火止用水沿いに多数開業された点

③作られた酒を最大消費地の江戸に出荷することができる河岸場があった点

元禄14年(1701)には2軒、天明5年(1785)に4軒、天保14年(1843)には6軒と引又の酒造業者の数は増えていきました。天保14年当時の引又全体の酒造石高は合計で1,568石もの鑑札を得ていました。鑑札とは、江戸時代に酒造業を認可された家に交付された営業権のことで、札には酒造米高が記入されていました。

そんな中、慶応2年(1866)の米価高騰の際に酒造業者が生産制限を課せられたことにより、引又の酒造業もその影響を受け、392石まで減りました。

明治20年代に入ると西山鉄五郎、三上健次郎、佐藤又七、平野定吉の4軒が引又の酒造業を牽引する形になり、各酒造家の主要銘柄は西山家が「花姿・国柱」、三上家は「猩々舞・伊佐川」、佐藤家は「正吉」、平野家は「喜代宗」でした。

埼玉県全体の酒造業は、兵庫県灘地区の銘柄「白鶴」「菊正宗」を競合視するほどの大産地でした。明治8年(1875)にいち早く酒造組合を結成し、灘地区に対抗するため、東日本全体の組合設立に向けて主導していきました。その埼玉県酒造組合長を明治30年(1897)から18年間務めたのが西山鉄五郎でした。

埼玉県全体の清酒出荷量は、令和3年(2021)においても県内に34蔵を持ち、全国4位を誇っていますが、残念ながら志木市内に酒蔵は残っていません。

※参考文献：「しきふるさと史話」、「埼玉産業歴史探訪」



## 未来へ続くまちづくりを。

今月号の特集「埋蔵文化財が語る いにしへの志木」では、イヌを模したような動物形土製品や、把手が人の顔の形をした縄文土器など、ユニークな文化財が紹介されましたが、どのくらいご存じでしたでしょうか？志木市の文化財といえば、ほかにも国の重要有形民俗文化財に指定された、かつての引又宿(江戸時代の本町付近)の経済力と人々の富士山信仰を今に伝える「田子山富士塚」や、宗岡の稲作を江戸時代から支え、明治時代に改修された「いろは樋」の一部であるレンガ積みの「いろは樋の大枡」など、魅力ある文化財が、街のあちらこちらに存在します。埋蔵文化財保管センターや郷土資料館にも足を運んでいただき、志木市の歴史に思いを馳せてみてください。

さて、今年も残すところ1か月を切りました。12月は「師走」とも呼ばれ、これは師僧が経をあげるために東西を馳せる月であったところから、師馳す(しはす)…「師走」となったという説は有名ですが、私自身は、年末は

もちろん、1年間を通じて慌ただしく走り回り、新たなプロジェクトを進めてきた1年と感じています。

振り返ると、2月に市民活動や交流の拠点であるふれあい館「もくせい」がリニューアルオープン。3月には市民会館が閉館し、市民会館と市民体育館の機能をあわせもつ新複合施設の整備に向け、解体工事に着手しました。昨年7月に完成した新庁舎が2023年度グッドデザイン賞を受賞しましたが、新複合施設も魅力ある施設となるよう整備を進めていきます。また、5月には土・日曜日、祝日も開所する市民サービスステーションが開設し、7月末には国道254号和光富士見バイパスが部分開通するなど、まちづくりが大幅に前進した1年となりました。

一方で、利用者がピーク時と比較して大幅に減少するとともに、老朽化した車両の維持費や燃料費の高騰により事業費の増加が続いていたふれあい号について、町内会や利用者の皆様へ、説明会などを通じて来年度からの廃止をお示した年でもありました。限られた財源の中でも社会情勢の変化に伴う新たな福祉サービスを充実していくためには、事業の取捨選択が必要です。苦渋の判断ではありましたが、まちづくりを通じて1人でも多くの笑顔を作ることが、行政の使命であり、私の信念でもあります。人口減少や加速する少子高齢化…、先行きの厳しい将来ではありますが、課題を見極めながら先送りにせず、市民皆様のまちづくりへの思いと、丁寧な説明を大切に、未来を切り開いていきます。